
この学校には一つの怪談があた

こーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「」の学校には一つの怪談があった

【著者名】

「」

【発行年】

1

「」

へーへ

【あらすじ】

拓也が通う学校。「」の学校には一つの怪談があった。深夜、音楽室にあるピアノがひとりでに鳴り響く、ということがありふれた怪談だった。

「」の学校には一つの怪談があった。

深夜、音楽室にあるピアノがひとりでに鳴り響く、どこか「」へありふれた怪談だった。

その怪談が噂される以前の時代。

音楽室。ピアノを弾いている女と、その女の後ろに立っている男がいる。

「恵美、好きだ。付き合ってくれ」と男が言つ。女は振り返り「…私も拓郎のこと好き」そう言つた。

草木の匂いをのせた心地よい風が音楽室に入ってくる。まるで、そよ風が一人を祝福しているようだった。

時が進み、音楽室の怪談が全校生徒に知れ渡った時代。

教室の掃除が終わった。その後、いつものように学校裏の野原にいき時間を潰す。

その野原は音楽室に近く、窓から漏れ出てくる音色が聞こえてくる。吹奏楽部が演奏する音楽。けつして上手なほうではない。だが毎日上達している。そんな音楽を聴いていたのは、なにより僕自身が音楽を聴くのが好きだったからだ。仰向けに 草や土で制服が汚れるのも厭わず 寝転びながら、音楽を聞きながら青空を見ている時間が好きだったから。

ただピアノの音が気に食わなかつた。母さんが弾くピアノと比べたら天と地の差がある。母さんが弾くピアノの音色。思い出すだけ

で幸せな気持ちになる。

その音を消すために一度、吹奏楽部に入ろうと思つた。

だが僕はピアノを弾くのを止めたんだ。一年も弾いていない。どうせ、うまく弾けないだろうし部活に入ったところでピアノを弾かせてくれるはずがない。

それに、ピアノの前で泣いていた父さんのこともある。だから、部活に入るのをやめた。

家に帰つた。

狭い玄関に父さんの靴がある 三足と置けない狭い玄関には似合わない、黒光る立派な革靴。

玄関を上がり「ただいま」と僕は言つ。

「おい、拓也、酒、買って来い」振り返りもせず、僕の顔を見ないで父さんが言つ。

父さんの背中が見える。ひどく猫背になつており、片手にビールの缶を持っている。

また失敗したんだ。これで四回目、四社目。

「うん」僕は文句も言わず買いに行く。

父さんが四十で失業し、就職活動をしている。失業してから、もう半年が経つた。

「あら、またお父さん落ちたの?」近所のスーパーで働く、隣人のおばちゃんが籠の中に入れたビールを見て聞いてきた。

中一の僕が酒を買うには家の事情を知っている店員じゃないといけない。けど、なにも全て教えないでもいいだろ。教えたくない、嫌だ。父さんが馬鹿にされる感じがするから。

このばばあ、わう思いながらも我慢し「そりなんです」それだけ言つてやつた。

「ばばあは、それで納得した。

「そう、お父さんに、あまり飲むんじゃないよって言こなさこよ。

飲みすぎは体に悪いんだから

「はい」

その夜。

父さんは酔っ払い、いつものようにピアノを眺めながら泣いていた。前の家から引っ越した時、貧乏になつてもけつして離さないと言い、この狭いアパートに持ってきたピアノ。母さんが弾いていたピアノ。母さんのピアノ。

父さんはテーブルの上に顔をつけ、寝始めた。酔いつぶれた。

「恵美、父さんが寝言を言つ。

僕は父さんに毛布をかけてあげる。

「頑張つて」それだけ、つぶやくように僕は言つた。

僕も眠ろうと布団の中に入る。

酔いつぶれた父さん、泣きながら寝る父さんを見ると、いつも母さんが死んでしまった時のことを思い出す。

「死にたくないよ」母さんが死ぬ直前に言つた言葉。そう言つた時、母さんは僕の腕をギュッと握つていた。痩せ細り、綺麗だった髪が抜け落ちてしまつた母さん。

その言葉を思い出した後、母さんの右手を握つて父さんの左手を握り、母さんと父さんに挟まれるように歩いたことを思い出す。母さんと父さんの間で楽しい気分で歩いていたことを思い出す。母さんが癌に蝕まれる以前の、幸せだった時の思い出。

僕は一つの記憶を何度も思い出しながら、悲しみながら黙りにつづいていた。

僕のクラスの先生は、他の先生とは違つていた。変わり者だった。その先生は怪談の真偽を確かめるために音楽室にビデオカメラを設置し、何事も起こらないことを証明した。

生徒達は、「それだけでは信じられない」と言い、先生と共に数名の生徒が深夜に音楽室に確かめに行つたといつ。

その結果、先生達は何も奇怪な経験をすることなく、怪談はデマだということを証明した。が、ピアノと対面した際に生徒の中ではだ一人　僕と同じクラスの生徒が　突然、気を失つたらしい。先生は、その場に居た生徒達に氣絶した生徒がいたことを言いふらさないよう口止めした。が、先生が口止めをしたところで生徒が素直に従うことはなかつた。

ただの肝試しとなつた深夜の調査後、数日間は氣絶した生徒の話で僕のクラスは盛り上がつていた。

先生達一行が怪談の真相を明かしてきた次の日だった。

音楽の授業、リコーダーの演奏テストだつた。僕の苗字は相川。別室にて、五十音順に個別でテストを受けていたので、僕は最初にテストを受け終わり暇な時間を過ごしていた　テストは、なんなく最高評価のAをもらつた。

暇つぶしに音楽の教科書を読んでいたときだつた　有名な音楽家の過去を読むのは面白かつた。

「なあ拓也。聞いたか？俺が氣絶したの」後ろの席の有賀が、テストが終わり暇になつたのか話しかけてきた。

「ああ、聞いたよ」教科書を机の上に置き、振り返る。

「気になるだろ、何を見たのか

「何か見たのか？」

「ふつふつふ。気になるよなあ

「話したくないなら別にいいよ」教科書を掴もうとする。

「いや、聞いてくれ」有賀が席を立ちピアノのほうに近づく。よほど自分の武勇伝を聞かせたいらしい、たいして仲が良いとはいえない僕に話したがるのだから。

「ここにな、黒い長髪、椅子にかかるくらい長い髪の女が座つていたんだ」ピアノ演奏者が座る椅子を指差す。

「マジ？見えたの？」テスト待ちしている永沢　有賀と同じく肝試しをした女子　が聞く。

「見えた。そしてな、ピアノの音が聞こえた」

「ウソ。私たち聞いてないよ」

「でも！俺は聞こえたんだ」

「で、それだけで気絶したのか？」と俺が聞く。

「いや、そこまでは大丈夫だつたんだけど、その女が立ち上がりつて俺に向かつて走り出したんだよ」

「ウッソだー」と永沢と同じようにテスト待ちをしていた 盗み聞きしていた 西田が言う。

「本当なんだつて。逃げようとしても足が動こうとしないし、貞子みたいに前髪で覆われた真っ黒な顔を近づかせてきて」

「で、それだけで気絶したの？」情けない、とでも言つてこるような顔をしながら永沢が言つ。

「女が俺の腕を握つてピアノのほうに引っ張ろうとしたんだよ。そこで氣を失つた。あの世に連れて行かれそうだつて思つて」

「わざと氣絶したフリしたんじょ」と永沢が言つ。

本当なのだろうか？ピアノに近づき、じっくり見てみる。普通のピアノに見える、何一つ不気味な感じもしないが。永沢の言つとおり、有賀の一人芝居なのだろうか。

有賀たちの口論を聞かず、僕はピアノ演奏者の椅子に座り、鍵盤に人差し指を乗せ一音だけ奏でた（いたつて普通のピアノの音色）。すると過去の記憶が蘇つてきた。

母さんがピアノを教えてくれた。母さんが隣に座り、一緒にピアノを弾いた。うまく弾けた時、僕の頭を優しく撫でてくれた。母さんは優しく微笑んでいる。

「こら！席に座りなさい」隣の部屋から音楽の先生が出てきて怒鳴つた。

「うまくなつたね」過去に聞いたはず母さんの声が、先生の声を消して聞こえてきた。

僕の頭は聞こえてきた声のことで一杯になり動く気になれなかつた。そんな僕、怒鳴つても動こうとしない僕に気づいた音楽の先生

は「席に戻りなさい！」と僕の耳元で怒鳴った。その声で我に帰り、あわてて席に戻った。有賀は不思議そうな顔をしていたが何も聞いてこなかつた。

その日、一日中、考えていた。その声のことを。
母さんの声。僕は記憶のせいだと思い、大して気にしなかつた。
ただ、あまりにも鮮明に母さんの声を聞いたせいか涙が出そうになつた。

なぜだか、有賀の話に出てきた幽霊と母さんの姿が重なつた。
母さんも髪が長かつた。黒髪。椅子にかかるくらいの長髪。
僕と同じような背格好の有賀。もしかしたら、母さんは有賀と僕を間違えたのか？

そんなまさか。そう思い、怪談のことは忘れようとした。
子供を怖がらせるようなことを母さんがするわけがないし、なぜ学校に出ないといけないのか。もとより、幽霊など存在しない。

有賀の説明が悪かつたのか、それとも先生が肝試し後、音楽室に一週間泊り込んだ。先生が泊まった際、何も奇怪な現象は起らなかつた。ことが原因なのか分からぬが、音楽室の怪談は僕が卒業する時には忘れ去られていた。

その日、一年ぶりにピアノに触れた日、母さんが死んでから始めてピアノに触れた日。

父さんはまた就職に失敗して、やけ酒をしていた。
僕はいつもどおりビールを買いに行き、酔いつぶれて寝ている父さんに毛布をかけて眠りについた。

俺は夢を見た。

恵美がピアノを弾いている。俺は恵美の後ろにいる。恵美の美し

い長髪を見ている。

周りを見渡す。俺と恵美が出会った場所、俺が告白をした場所。音楽室だ。

恵美が奏でる音色が俺の中に幸福に似た感情を湧かせる。音楽室には俺と恵美だけ。開いた窓から雲ひとつ無い青空が見え、草木の香りをのせた心地よい風が入ってくる。

あの時と同じだ。俺が恵美を愛した、愛おしいと思つた時と同じだ。

「拓郎。拓也を幸せにしてね」恵美がピアノを弾きながら言つ。

「ああ、まかせろ」

恵美は振り返り、俺を見つめる。優しく微笑んでいる。

目が覚めた。テーブルの上に乗つてゐるビールの缶が見える。晩酌をしたまま、その場で寝てしまつたのか。

夢の映像、声、音色が鮮明に思い出された。

悲しみが押し寄せる。

なんで俺を残して死んでしまつたんだ、恵美。

変えられない死に悲しみ、その死を恨んだ。テーブルを叩こううとい、

拳を上げた。はらりと肩にかかっていた毛布が落ちる。

拓也。本当に良い子に育つた。拓也のためにも頑張らなければ。もう深夜一時になつていた。上げた拳を静かに下ろす。

静かに襖を開き、隣の部屋を覗いてみる。

二組の布団が敷いていたが、そこには誰もいなかつた。

拓也がいない。

周りを見渡す。音符の記号が書かれた壁紙。ベートーベン、モーツアルト、ショパン、バッハなどの絵画。すべて、薄暗い闇に覆いかぶさり不気味に見える。

なぜ僕は、こんな夜中に音楽室にいるんだ。たしか家で寝ていた

はずだ。それにパジャマを着ている。なぜだ。

僕は自分の頬を叩いた。目が覚めるくらい思いつきり叩いた。

「いつてー」つい声が出てしまつ。静寂の中、自分の声だけが響く。夢ではないのか、現実なのか。

学校で噂されている怪談を思い出した。夜中、学校からピアノの音色が聞こえてくるという怪談。誰もいるはずのない音楽室から聞こえるピアノの音色。有賀が見た幽霊。幽霊につかまれ、どこかに連れて行かれそうになつた、有賀。

ゾツとしたが好奇心が強かつた。ピアノを見てしまつた。

目の前の情景が脳に入つてくる。

ピアノが月光をつけ綺麗に輝いていた。

それを見て恐怖は消えた。あまりにも美しくきらめいているから

後で、この情景を思い出したが鍵盤の前には、演奏者の席には

誰もいなかつたはずだつた。

突然、ピアノが鳴り出した。

驚きはした。だが、それ以上に嬉しさが強かつた。

なぜなら母さんがいたから。母さんが椅子に座りピアノを弾いているから。母さんの顔がはつきりと見えたから。生きていた時と同じ優しい笑顔を僕に向けている。

涙が出そうになつた。

「母さん」そう言つて近づこうとしたが足が、体全体が動かなかつた。

「拓也。やりたいことをしなさい。父さんは悲しまないから」母さんの優しい声が聞こえた。

母さんの姿がぼやけてきた。

目の前の情景が見えないくらい涙が出てきていた。

動けるようになつた右手で涙を拭い、情景が見えるよつになつた。だが、見えてきたのは自分の部屋、毎朝目覚めたら見える天井だつた。

「た、拓也」父さんの声がする。布団の中にいる僕を抱き上げる父さん。

「どうしたの?」奇妙な状況に驚くよりも父さんが僕を抱きしめてくれたことのほうが嬉しく、驚きを消してくれた。

「どこに行つてたんだ。心配したんだぞ」怒りなど無く、心から心配している声。

「えっ? 僕、いなかつたの? ここ?」

「そうだぞ、用が覚めたらいなかつた。こんな深夜にいなくなつて...じゃあ僕は今さつきまで、本当に音楽室にいたのか。夢ではなく現実に起きたことなのか。

そう思ひと嬉しいと悲しいを同時に感じ、ある決心が生まれた。

次の日、父さんは昨夜のことを、ただの見間違いだ、酔つ払つていた、と言つた。あまりにも信じられることがなかつたから。僕も夢だった、そう信じようとしていた。一年ぶりにピアノに触れたせいで、あんな夢を見たんだ。と、自分の納得する、一番ありえる説明を作つた。

だが現実に起こつたことだとしたら、どれだけ嬉しいことか。心のどこかでは、母さんが夢のなかに現れアドバイスをくれた、そう信じたかった。

夢を見た日からピアノの練習をした。一日、練習をしただけで以前と同じように弾けるよになつた。そして、吹奏学部に入つたピアノを担当していた生徒は、いやいやピアノを弾いていたらしく、すぐにピアノの担当、ピアノを弾けるよになつた。皆との演奏はとても面白かった。

父さんも職に就くことが出来た。前の仕事とはまったく違う仕事らしい。「金を稼ぐのに仕事を選んでいらっしゃない」と父さんが言つていた。そう言つた後、「お前のため、恵美のためだ」と小さな声で言つていた。自分に言い聞かせるかのように言つていた。

僕は母さんが好きだった曲をピアノで弾けるようになつた。父さんに聞いてほしくて一生懸命、練習した。母さんと回り回り上手くなるために。

狭いアパートで父さんと就職祝い 僕と父さん、一人つきりのパーティ で弾いてあげた。母さんのピアノで。

演奏中、母さんが隣に居るような感じがした。

気のせいだつたのかもしれない。だけど、鍵盤を、楽譜を見ていた視界の隅に母さんが幽かに見えていた。そして母さんのぬくもりも伝わってきた。

嬉しかつた。僕達を守つている。

本氣でそう思つてゐるわけではない。だが、そう思えただけでいいだろう。死んでしまつた者、もう会えない者なのだから。

演奏が終わり、母さんが見えていた場所に目を向けた。思つていたとおり、そこには誰もいなかつた。

その時、悲しさは無かつたといつたら嘘になるな。

父さんは僕の演奏を上手だと褒めてくれた。そう言つてくれた時、父さんは嬉しそうに泣いていた。僕も嬉しくて泣いてしまつた。母さんも聞いていたのかもしれない、と淡い思いも抱きながら泣いてしまつた。

こんなに泣いていたら母さんに心配されるな。ははつ。

……今だけは許してよ、母さん。これからは笑い続けるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3205c/>

この学校には一つの怪談があた

2010年10月8日15時15分発行